

○ [伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]の「言葉の特徴やきまりに関する指導事項」の構成と指導上の留意点はどのようになっているか。

[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]の「言葉の特徴やきまりに関する事項」は次のような構成になっている。

- 言葉の働きや特徴に関する事項
- 表記に関する事項
- 語句に関する事項
- 文及び文章の構成に関する事項
- 言葉遣いに関する事項
- 表現の工夫に関する事項

「言葉の特徴やきまりに関する事項」を指導する際には、次の点に留意する。

- 1 3領域と密接に関連付けて指導するようにする。
- 2 特定の事項をまとめて指導したり、繰り返して指導したりすることが必要な場合については、特にそれだけを取り上げて学習させるよう配慮する。

なお、それぞれの指導事項の具体的な内容や留意点は次の表のとおりである。

各学年における言葉の特徴やきまりに関する事項

指導事項	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
言葉の働きや特徴に関する事項	(ア) 言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。 (イ) 音節と文字との関係や、① <u>アクセントによる語の意味の違い</u> などに気付くこと。 (ウ) 言葉には、② <u>意味による語句のまとまり</u> があることに気付くこと。	(ア) 言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと。 (イ) ③ <u>漢字と仮名を用いた表記などに関心をもつ</u> こと。	(ア) ④ <u>話し言葉と書き言葉との違い</u> に気付くこと。 (イ) ⑤ <u>時間の経過による言葉の変化</u> や⑥ <u>世代による言葉の違い</u> に気付くこと。
	<p>【解説】</p> <p>① 「橋」と「箸」, 「雨」と「飴」など、同音の語でもアクセントによって意味が異なる場合があることを指している。</p> <p>② ある語句を中心として、同義語や類義語, 対義語など、その語句と様々な意味関係にある語句が集まって構成している集合を指している。</p> <p>③ 性質や役割の異なる漢字や仮名を交ぜて書く「漢字仮名交じり文」という日本語の表記の仕方に関心をもつように指導し、交ぜて書くことの利点に気付いたり、句読点を含め読みやすい表記を考えながら書いたりする言語感覚の基礎を養うことを示している。</p> <p>④ 両者の違いについて気付かせることは、それぞれの特質に配慮した使い分けを身に付けるための基礎を養うことになる。</p> <p>⑤ 時間の経過で変化する言葉の特質に気付いたり、言語文化としての古典に親しみ、受け継いでいく態度を養ったりする契機とする。</p> <p>⑥ 年配者と、年少者や若者には、それぞれの世代に特有の言葉遣いがあることを指す。</p>		

指導事項	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
表記に関する事項	(エ) <u>⑦長音、拗音、促音、撥音</u> などの表記ができ、助詞の「は」、「へ」及び「を」を文の中で正しく使うこと。 (オ) <u>⑧句読点の打ち方</u> や、かぎ(「」)の使い方を理解して文章の中で使うこと。	(ウ) 送り仮名に注意して書き、また、 <u>⑨活用に</u> ついての意識をもつこと。 (エ) <u>⑩句読点を適切に打ち</u> 、また、段落の始め、会話の部分などの必要な箇所は行を改めて書くこと。	(ウ) 送り仮名や <u>⑪仮名遣い</u> に注意して正しく書くこと。
	<b>【解説】</b> ⑦ 長音とは「おか <u>あ</u> さん」のように「のばす音」、拗音とは「 <u>きゃ</u> 」、「 <u>きゅ</u> 」のように「ねじれる音」、促音とは「ら <u>っ</u> ぱ」のように「つまる音」、撥音とは「ん」の字に当たる「はねる音」のことである。 ⑧ 句点については、入門期から、文を書く際には、文末に必ず句点を打つように指導し、文意識を育てていくようにする。読点については、文頭の接続詞などの後、主語の後、従属節の後、並列する語の後など必要な箇所に打つことを理解させるようにする。 ⑨ 一つ一つの具体的な語の送り仮名の指導をするだけでなく、その学習を通して、活用語尾を送るという送り仮名の原則的な付け方についても理解を促して、活用についての意識をもつようにする。 ⑩ 中学年では、それに加え、文を読みやすくまた分かりやすくするために、文脈に合わせて適切に打つことができるように指導する。 ⑪ 仮名遣いについても、語句の構成などに注意して指導するようにする。例えば、「鼻血(はなぢ)」と「地面(じめん)」、「みずうみ(湖)」と「みかづき(三日月)」などの区別を付けて、正しく表記できるようにする。 その際、「送り仮名の付け方」(昭和48年内閣告示)や、「現代仮名遣い」(昭和61年内閣告示)の内容を十分に踏まえ、児童の仮名遣いの実態などと関連を図ることが大切である。		
語句に関する事項		(オ) 表現したり理解したりするために必要な語句を増し、また、語句には <u>⑫性質や役割の上で</u> 類別があることを理解すること。 (カ) 表現したり理解したりするために必要な文字や語句について、 <u>⑬辞書を利用して調べる方法を理解</u> し、調べる習慣を付けること。	(エ) <u>⑭語句の構成、変化</u> などについての理解を深め、また、 <u>⑮語句の由来</u> などに関心をもつこと。 (オ) <u>⑯文章の中での語句と語句との関係</u> を理解すること。 (カ) 語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつこと。
	<b>【解説】</b> ⑫ 「性質」の上での類別とは、物の名前を表す語句や、動きを表す語句、様子を表す語句のように類別すること、「役割の上」での類別とは、文の主語になる語句、述語になる語句、修飾する語句のように類別することである。 ⑬ 辞書を利用する能力や態度を育て、習慣を付けるために、国語辞典や漢字辞典などの使い方を理解するとともに、必要なときにはいつでも辞書が手元にあり使えるような言語環境をつくっておくことが重要である。 ⑭ お米の「お」のような接頭語、お父さんの「さん」のような接尾語のほかに、複合語、略語、慣用語なども含んでいる。 語句の変化については、例えば、「花+畑」で「ハナバタケ」というような音の変化、「帰る+道」で「帰り道」というような語形の変化、また「物」と「物物しい」のような意味の変化などがある。 ⑮ 語源を調べたり、和語、漢語、外来語などの区別について関心をもったりできるようにすることが効果的である。 ⑯ 文章は、類義語や対義語、上位語・下位語、派生語など、語句と語句との関係に基づきながら記述されており、そのような語句相互の関係を理解することによって内容の把握を的確にすることを理解させる。		

指導事項	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
文及び文章の構成に関する事項	(カ) 文の中における主語と述語との関係に注意すること。	(キ) <u>⑰修飾と被修飾との関係など、文の構成について初歩的な理解をもつこと。</u> (ク) <u>⑱指示語や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割を理解し、使うこと。</u>	(キ) <u>⑲文や文章にはいろいろな構成があることについて理解すること。</u>
	<p>【解説】</p> <p>⑰ 中学年では、主語と述語に加え、修飾と被修飾との関係をはっきりさせるとともに、「だれが」、「いつ」、「どこで」、「なにを」、「どのように」、「なぜ」などという文の構成について、初歩的な理解ができるようにする。</p> <p>⑱ 指示語や接続語は、文や文章の構成にかかわる語で、文章の論理的な関係を構築する上で大切な役割を果たしている。読みの指導の中では、文相互の関係とともに、段落相互の関係を端的に示す手がかりとなるものとして指導する。また、文章を書く様々な機会をとらえて、文脈に沿って指示語や接続語の役割を理解し、使うことの指導を工夫することが大切である。</p> <p>⑲ 構造からみて、単文・重文・複文に分けたり、性質や機能からみて、平叙文、呼びかけや疑問、応答を表す文、命令や承諾を表す文、推定や伝聞を表す文、感動や感嘆を表す文に分けたりすることなどが考えられる。</p>		
言葉遣いに関する事項	(キ) <u>⑳敬体</u> で書かれた文章に慣れること。		(ク) <u>㉑日常よく使われる敬語の使い方</u> に慣れること。
	<p>【解説】</p> <p>⑳ 「敬体」とは、文末が「です」、「ます」又は「でした」、「ました」などになる文体である。また、「常体」とは、文末が「である」、「であった」などになる文体である。</p> <p>㉑ 高学年においては、相手と自分との関係を意識させながら、尊敬語や謙譲語をはじめ、丁寧な言い方などについて理解することが大切である。敬語の役割や必要性を自覚してくる時期であるので、相手や場面に応じて適切に敬語を使うことに慣れるよう、児童の日常の言語生活につながる指導方法を工夫することが大切である。</p>		
表現の工夫に関する事項			(ク) <u>㉒比喻や反復などの表現の工夫</u> に気付くこと。
	<p>【解説】</p> <p>㉒ 具体的な表現の工夫には、比喻や反復をはじめとして様々なものが考えられる。擬音語・擬態語、語句の反復、誇張などは低学年の児童が読んだり書いたりする文章中にも頻繁に見られる。学年が進行するにつれて直喩、隠喩などの比喻やユーモア、また、省略、倒置、対句など構成上の工夫も多くなる。そこで、多様な文章に表れる様々な表現の工夫に気付いたり、自分の表現で活用したりするように指導することが大切である。</p>		